

を含め国際社会からも高い関心を集めている。

今後、我が国としては、アジア森林パートナーシップ等の取組を通じ、世界の森林の持続可能な経営に向けリーダーシップを発揮しつつ具体的な行動を展開していくことが求められており、関係国や国際機関、NGOや民間企業・団体、試験研究機関など幅広い関係者との協力を一層積極的に推進していく必要がある。

## 図書紹介

◎**マングローブ ーなりたち・人びと・みらいー**（日本地理学会「海外地域研究叢書」1）宮城豊彦・安食和宏・藤本 潔 著，古今書院，東京，193 pp. 2003 3,500 円＋税

マングローブ生態系は、その周辺で生活を営む人びとにとって薪炭などの燃料、住居の柱や屋根などの建材、染料、食料などを得るための二次林、あるいは漁場として、いわば「海の里山」的な役割を果たしてきた。しかし、近年、エビ養殖池造成に代表される強度な利用、人為インパクトによって、マングローブ生態系は世界規模で急速に失われつつある。本書は、筆者らが太平洋・東南アジア地域のマングローブ林を対象として20年を行ってきたフィールド調査から得られた成果に基づいて、マングローブ生態系の特性・特徴を紹介し、マングローブ生態系における自然・人間相互の関係を解説したものである。

本書は副題にあるように、マングローブ生態系の「なりたち・人びと・みらい」の3部より構成されている。第1部は、「マングローブとはなにか」、「マングローブ生態系と立地環境」の2章から構成され、マングローブ生態系の定義、諸特性、成立要因、立地変動史などが解説されている。第2部は、「マングローブの利用」、「マングローブ林の破壊と養殖池への転用」として、地元の人びとの生活の場であるマングローブ林の伝統的な利用形態や、近年の人為インパクトの増大によるマングローブ林の減少の経緯に触れ、「海の里山」であるマングローブ生態系に及ぼす人間社会の影響について解説されている。そして、第3部は、「地球環境問題とマングローブ林」、「マングローブ林の植林」からなり、地球環境変動によって被ると予測されるマングローブ林の危機、地球環境の維持に果たしているマングローブ林の役割、マングローブ林復元・保全のための各国における植林事業について述べられている。そして、最終章は、筆者らがこれまでの研究プロジェクトを振り返りつつ、今後の研究課題を展開した座談会の記録となっている。

筆者らはマングローブ生態系を生物・生態学的に捉えるばかりでなく、マングローブを育む地理・地形、マングローブ生態系を形成する動植物、それらを取り巻く人間社会、さらに地球環境との相互作用を考慮してマングローブ生態系を捉え、ひと味違った世界を展開している。本書は、マングローブ生態系の維持・成立における自然と人間社会との相互作用に関する知見を与えてくれるばかりでなく、森林生態系を対象として研究を推進していく上で研究分野を越えて幅広い視点から研究対象を捉えていくことも大切であることを教えられる一冊である。（小野賢二）